

第十五回 齋藤茂吉短歌文学賞

清水房雄 『獨孤意尙吟』

不識書院

選考委員

委員長 岡井 隆

委員 尾崎左永子

川村二郎

永田和宏

前 登志夫

(五十音順)

清水房雄 『獨孤意尙吟』

(自選十首)

永遠の平和など有り得るわけが無い甘つたれるなと手記残りたる

たちまちに嘘のごとくに吾老いてうつむきのぼる駅の階段

もしもあの時と思ふことあり様々の曲節を経て今に老いたり

「総員起し総員起し」愕然と起きなほりたり夢にてありしか

咲くカナナしばみしカナナ傍らに命ひさしき者は立ちたり

平和平和唱へて平和をよぶといふ御伽ばなしを始めしは誰か

ハードボイルド一章読みて投げ出しぬ短歌などよりよほど退屈

ぼたりぼたり雨に散りつぐ木蓮の花のしろたへ今年のその花

この集もて吾もいよいよ終末か守旧派最後の歌よみとして

すぐ目の前に近づける死を歌はむか歌はむか人笑はば笑へ

## ● 選考委員による選評

### 人間と社会への鋭い視線

岡井 隆

清水房雄氏の『獨孤意尙吟』は、長年の修練の結果といえる写真の力によつて、高齢の人の生活と心境を表現しつくしてをられます。鋭い人間観察と、時代に向けての辛辣な批評は時としてユーモアを湛へて、読む人の心をえぐります。すぐれた業績であると思はれます。

### 写生自在

尾崎 左永子

茂吉研究はむろん大切だが、今回は何とか歌集、それも熟達した作品を見出せないか、という希求が強かったので、写生系の清水房雄氏の『獨孤意尙吟』に光が当り、内心ほつとした思いがある。ともかく自在、破調も何のその、思いを率直に表明する。からりとした老年の個性が、確固とした信念を芯に据えて自由に流露し、共感を呼ぶ。日常性の中から全く獨孤の感性で事の本質をつかみ、漢語系のことばを自在にこなして、しかも理に落ちない。「獨孤意尙」が「どっこいしょ」を意味するとしたら、これまたじつに娯(た)しいではないか。男性歌の行きつくところを眼前に見せられた印象がこのころ。

### 老熟のユーモア

川村 二郎

年を取ってもどうしてそんなに元気なのかと聞かれて、人を食つてるからだ、と答えた日本の総理大臣がいた。歌集『獨孤意尙吟』を読んでいて、その言葉を思い出した。表題からして人を食っている。集中、老いを自覚して感慨を催しているかのような作は随処にある。しかしその感慨はめめめとした悲哀には少しも落ちこまず、むしろ老いという現象そのものを、時には突き放して、時には興味ありげに眺めているところに、老熟の成果としか言いようのない渋いユーモアが醸し出され、読者を笑いにむせせせたり思いに耽らせたりする。闊達にして透徹した八十翁の精神の、到達した境地の見事に驚嘆する。

### おおらか、かつシニカルな人間観察

永田 和宏

九十まで生きよと言ひ来し子の一人  
あと三年と気づかぬらしく  
思わず笑つてしまった。息子(だろう)の一人が、親父を気づかつて、九十までは生きろよな、などと言う。もちろん元気づきたいからだろうが、親父の方は、「いい気なもんだ、あと三年で九十だということも知らないらしい」などと、毒づくのである。なんだか長谷川町子の「いじわるばあさん」を彷彿させるような歌であるが、この一首に、この歌集の特徴もよくあらわれているように思われる。大胆かつシニカルな人間観察は、著者清水房雄さんにあつては、いかにもおおらかに發揮され、その切れ味の鋭さが、一読哄笑を誘うような快感を伴うのである。

## 老の気骨

前登志夫

清水房雄氏の歌集『獨孤意尙吟』は、わが草庵の机辺に置いて、折々ふと開いてみたい数少ない歌集である。

老の気骨ともいうべき歯切れの良さと、たくまざる響きのおのずからなる味わいをたのしむ。

「大帝国大企業大結社ろくなこと無し大とつくもの」

「学問はすべて実用のためといふ偏見も常識となりつつ今は」

「新聞論調がそのまま民の声となる奇妙な国の住人われわれ」

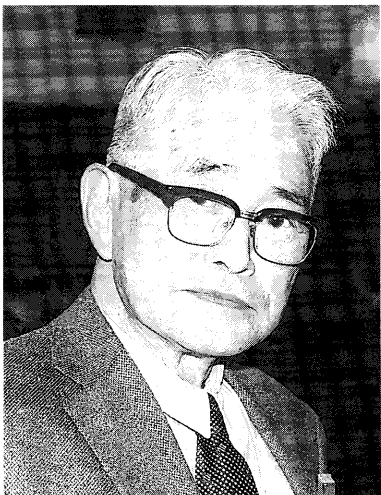
こうしたシニツクな文明や現代世相批判は、  
圧巻であり、批判しつつも暖かなのである。

しかも歌人としての底の力は、次のようなさりげない歌にもみられる。

「この一木きたなくなりて咲き残る中にこもりて遅きうぐひす」

「ろくでなしと人に呼ばれる自由人われ若き日の憧れなりき」

「花の香のかすか記憶にのこるのみ斯くの如きか老耄日常」



### 第15回齋藤茂吉短歌文学賞受賞者略歴

#### 清水 房雄 (しみず ふさお)

1915年千葉県生まれ。本名渡邊弘一郎。埼玉県さいたま市在住。東京文理科大学文学科漢文学専攻卒業。東京都立北園高校校長、昭和女子大学教授、文教大学教授を務めた。東京高等師範学校在学中、五味保義に作歌指導を受け、1938年「アララギ」に入会。土屋文明選歌欄に出詠し、以後、1997年12月の同誌終刊に至るまで第二次世界大戦後の「アララギ」の中心の一人として旺盛な作歌活動を続ける。歌会始詠進歌選者をはじめ、齋藤茂吉短歌文学賞、逄空賞等の選考委員を務める。

#### 歌集

「一去集」(第8回現代歌人協会賞)

「又日々」(第3回埼玉芸賞)

「風谷」

「停雲」

「天南」

「緋間抄 (しゅかんしょう)」(第17回日本歌人クラブ賞)

「散散小吟集」

「旻天何人吟 (びんでんかじんぎん)」(第32回逄空賞)

「老耄章句 (ろうもうしょうく)」(第22回現代短歌大賞)

「梓遊去来 (ふゆうきょらい)」

#### 研究書

「鑑賞長塚節の秀歌」

「子規漢詩の周辺」

「齋藤茂吉と土屋文明」など。

現在「青南」編集委員・選者、読売歌壇選者。

### 受賞の言葉

清水 房雄

私は若い頃、茂吉先生の作品については、幾人もの人の茂吉論に引かれていた名作の数々に接しましたが、歌集としては最初に接したのが『寒雲』でした。そしてその世界に目のくらむような思いをしました。歌のすべてがここにあるではないか、と。

私はまかり間違つて歌の世界に入りこんだこの思いが、つき纏つたまま、半世紀の余をすぎました。盲滅怯努力だけはしたと思うのですが、天分には全く自信無く、機会は逃しつ放しだったに違いありません。じたばたしても自分の歌は物にならぬと知った時、不意に嬉しくなりました。どうやら自分は歌が好きなのらしい、と。気が楽になりました。

が、そうした私の前方遙か高処に、とても人間とは思えぬ巨大な齋藤茂吉像がありました。大きすぎる。高すぎる。仰ぎ見るだけで、どうしようも無い。その思いのままに長い長い時を経た今、この賞を戴くことになり、身のすくむ思いで居ります。推薦下さった方々、選考下さった方々に、心からお礼申しあげる外ありません。ありがとうございます。

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆 『親和力』 砂子屋書房  
第二回 本林勝夫 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社  
第三回 塚本邦雄 『黄金律』 花曜社  
第四回 前登志夫 『鳥獸蟲魚』 小澤書店  
第五回 斎藤 史 『秋天瑠璃』 不織書院  
第六回 近藤芳美 『希求』 砂子屋書房  
第七回 小暮政次 『暫紅新集』 短歌新聞社  
第八回 馬場あき子 『飛種』 短歌研究社  
第九回 吉田 漱 『白き山』 全注釈』 短歌新聞社  
第十回 佐佐木幸綱 『吞牛』 本阿弥書店  
第十一回 伊藤 博 『萬葉集釋注』 集英社  
第十二回 森岡貞香 『夏至』 砂子屋書房  
第十三回 竹山 広 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房  
第十四回 藤岡武雄 『書簡にみる斎藤茂吉』 短歌新聞社

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

千九〇一八五七〇

山形市松波二丁目八一― 山形県文化環境部文化振興課内  
TEL・〇二三―六三〇―二二四八